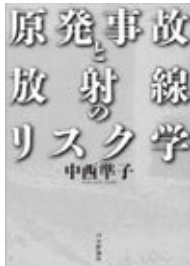


本棚



原発事故と放射線のリスク学

中西準子 著



東日本大震災後、福島第一原子力発電所の事故による放射線被ばくの影響が非常に不安視されて、それに関する著書が数多く出版された。本書はリスク評価の観点から低線量被ばくのリスクと対策を考える本である。

著者の中西準子先生は、長年化学物質のリスク評価に携わって、日本のリスク評価分野の第一人者である。しかし、放射線は専門分野ではないため、執筆に当たり、放射線生物学が専門で、ICRP 委員である京都大学名誉教授の丹羽太貫先生や、経済学者で明治大学准教授の飯田泰之先生など、たくさんの専門家にインタビューした。専門知識についても詳しく、分かりやすく書いている。

第1章は放射線の基礎知識をまとめた。被ばく線量の推定に使われた直線しきい値なし (LNT) モデルの意味について丁寧に説明している。

第2章は事故後の放射線被ばく線量の実態につい

て説明し、除染事業の現状、問題点と提案について書いている。今回の事故で、被ばく線量が十分低く、リスクを論ずるまでもない状況でも、多くの人が不安に思う原因を探り、後半には新しい除染目標値を提案した。

第3章は経済学者飯田泰之先生との対談で、除染か移住かを巡って、除染費用や経済への影響を述べている。

第4章は放射線のリスク評価と化学物質のリスク評価の比較である。残念ながら日本のリスク評価分野があまり進んでおらず、海外の事例、例えば農薬として使われていた DDT の使用禁止に至るまでの経緯や利弊を引用して議論した。放射線のリスクもできるだけ減らしたいが、ある程度のリスクを受け入れることが必要と提言している。

第5章は「婦人公論」からの転載で、社会学者上野千鶴子先生との対談である。女性研究者の研究テーマ選択から本業の研究内容まで、話題が幅広い。原発事故については安全基準やリスクの受容に見解を示している。

本書はリスク評価専門の研究者の視点から、大量のデータを引用し、図表を多数提示して、一般読者にも分かりやすく説明し、現状だけではなく、国、自治体、住民に今後のすべきことを大胆に提言している。原発事故について改めて考えさせられた1冊である。

尚 奕 ((独)放射線医学総合研究所
福島復興支援本部)

(ISBN978-4-535-58650-5, 四六判 312 頁, 定価本体
1,800 円, 日本評論社, ☎03-3987-8611, 2014 年)

日本アイソトープ協会図書 新刊のお知らせ

語りあうための ICRP 111 ^{new} —ふるさとの暮らしと放射線防護—

定価 1,200 円 + 税 会員割引価格 1,080 円 + 税

ICRP 111 は、チェルノブイリ事故からの復興の道を被災地とともに歩んだ経験から生まれた放射線防護の専門書です。本書ではこの 111 を福島第一原発事故の視点から解説し、事故後の全体像をとらえ、復興を進める手がかりを探っています。放射線の基礎知識が社会のなかでどのように実践に結びついていくかを知りたい方のための、解説書です。ふるさとの暮らしを取り戻すための放射線防護を考えるすべての人に!

ご購入は JRIA BOOK SHOP にて → <http://www.bookpark.ne.jp/jria>